

家庭科学習指導案

指導者 浦 上 千 歳

日 時 平成24年12月 1 日（土）第 3 校時（13：00～13：50）
年 組 中学校第 2 学年 2 組（後半グループ） 計20名（男子 9 名，女子11名）
場 所 中学校家庭科室
単 元 「生活を豊かにする衣生活を考えよう」

単元について

平成24年度，全面実施となった学習指導要領の改訂については，「自己と家庭，家庭と社会のつながりを重視し，生涯の見通しをもって，よりよい生活を送るための能力と実践的な態度を育成する視点から，学校段階に応じた体系的な目標と内容に改善した。」といわれている。（文部科学省教科調査官 望月昌代氏：2008年 7 月 5 日の日本学術会議での配付資料）だが，その内容を見てみると，小・中学校段階では分野が 4 つに分けられて，衣生活と住生活が同じ分野に位置づけられている。さらには，日本の織と衣の伝統・文化という観点が希薄であり，現在行われている衣生活の文化的側面の学習内容としては，日本の民族衣装である『和服』の構成と着装が入っているだけである。また，体験活動として多くの学校でミシンを使用した「暮らしに役立つもの」の製作に取り組んでいるが，授業時間数が少ないこともあり，教材会社からのキットを利用し，袋や小物の製作を行っていることが多い。

衣生活の学習には，①衣に関する科学を学び，科学的な思考方法を身につけて日常生活を合理的なものに改善することができる，②針と糸と布を使ったものづくりの体験により，手指の巧緻性が高まるとともに，ものを創造することの楽しさを味わい，また忍耐の必要性を実感して，精神を豊かに育むことができる，③日本の世界に誇るべき布や衣服・衣装の学習を通してこれらに対する敬意が芽生え，伝統文化を継承発展させようとする気持が生まれて，これが日本人としてのアイデンティティに結びつく，という教育的価値が備わっていると考えている。とりわけ③に関しては，家庭科での学習を通して，生活環境が大きく変化する中で急速に失われつつある伝統的な衣生活文化を若い世代に伝え，振興する力となってもらいたいという思いから，本単元を設定した。

本単元では，人の生活と布のかかわりを歴史的に探り，布の文化に触れさせることで，衣服に対する興味・関心を高め，古来より生活の知恵として日本人が利用してきた柿渋染め活動を取り入れる。天然染料である柿渋は，まだ化学繊維や化学染料のない時代に庶民の暮らしを支えてきた身近な染料で，染色方法が簡単である。日本の伝統や文化に根ざした豊かな生活文化を理解し，それらを楽しみながら製作の中で自己実現することが可能な教材であると考え，指導に取り入れた。

これまで生徒達は，1 年生で「衣生活と自立」の領域で『衣服の選択と手入れ』について学んできた。『選択』では，目的に応じた着用・計画的な活用について，また，『手入れ』では材料や状態に応じた洗濯を中心に学んできた。文化的内容としては，2 年生になって，衣服の構成（和服と洋服の構成の違い）を学んだだけである。また，生徒たちを取り巻く衣生活を見ると，安いものを手軽に入手し，それをまとうことが，その中心で，大量生産大量消費の大きな渦の中で，選ぶというよりは，流行に誘導され，与えられているように感じられる。

7 月に，家庭科の学習内容に関する興味・関心についてアンケートを実施したところ，衣生活に興味・関心があると答えた生徒は25%で，[食生活]の53%の半数であった。さらに，[衣生活]の学習内容別に「もっと知りたいか」という問いに対して，一番高かったのが[製作]42%で，次いで[文化]の38%であった。[衣服の役割]や[繊維の特徴]などいろいろな学習内容があるが，それらより，[文化]に対

する関心が高かった。以上のことから、製作や文化に興味はあるが、それが実生活をよりよくすることにはつながっていないことが考えられる。

したがって指導に関しては、現代の私たちにとっては、食用としての認識しかない柿の効用を庶民の文化を探りながら学習させる。防水実験や柿渋染めの実践を通して、日本の伝統文化のすばらしさを体感することができ、古き良きものを見直すことができる。次に、日本の伝統的な美しい意味ある布を使用しての活動として、染めた布を使用して弁当袋の製作を行う。その際、江戸時代に一般庶民に広まった衣文化（裏優りや更紗の流行など）を学習させ、日本の文化を意識させたデザインを考えさせる。この活動で、自分たちの生活の中に、日本の伝統文化を活用することができる。この一連の学習により、衣生活における伝統文化を継承し発展させようとする気持ちが生まれることをめざす。

指導目標

1. 布を用いた物の製作に関心を持って取り組めるようにする
2. 私たちの生活と柿渋の関わりについて理解できるようにする
3. 意味ある布を活用して弁当袋を製作できるようにする

指導計画

- | | | |
|-----------------------------|------------|----------------|
| 1. 柿渋で染めよう江戸の色 | ・・・・・・・・・・ | 2時間（本時はその1時間目） |
| 2. 衣生活の移り変わり | ・・・・・・・・・・ | 1時間 |
| 3. 江戸の粋と更紗を取り入れた弁当袋をデザインしよう | ・・ | 1時間 |
| 4. 弁当袋の製作 | ・・・・・・・・・・ | 2時間 |

本時の目標

私たちの生活がこれまで柿とかかわってきた歴史を理解することができる。

「学びのつながり」の視点

家庭科では、生活実践力を高めるために、「文化的な」視点からのアプローチを考えた。Ⅲ期では、“生活を科学的にとらえた実践”として、柿渋染めを扱う。また、自分たちの生活と布のかかわりの歴史を学ばせ、弁当袋の製作の中で、江戸の文化を現代に生かす工夫を考え実践させる。そうすることで、普段の生活の中でも、日本の古き良き伝統文化を根底とした新たな視点で生活をとらえ直すことができるだろう。

学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
1. 導入（5分） □4枚の写真から共通項を考える （アクティブボード使用）	○個人で考えさせた後，“柿”であることを知らせることで、本時の授業の興味・関心を引くようにする。
2. 展開（35分） (1) 私たちの生活と柿の関わり □柿について考え，“食べ物として”の活用を知る	○2種類の柿（ふつうの柿・干し柿）を示すことで、普段の生活を思い起こさせるようにする。

<p>□柿の“薬として”の活用を知る 『里古りて 柿の木持ため 家もなし』（芭蕉）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この句の意味を考えてみよう ・昔のお坊さんが旅する時に持っていたものは何か考えてみよう <p>□柿の“コーティング剤として”の活用を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・青い柿（渋柿）を見て考える ・新聞記事を読んで考える ・布（木綿），紙，木が染められていたことを知る 	<p>○芭蕉の句やお坊さんの話から，柿が昔から日本の庶民に広く親しまれていたことに気づくようにする。</p> <p>○本物の青い柿を示し，その味について考えさせることで，食べ物としてではない，柿の活用があることに気づくようにする。</p> <p>○『備後渋』についての新聞記事を示すことで，“コーティング剤”としての柿の活用があることを理解できるよう指導する。</p> <p>○柿渋作りの過程の実物を示すことで，柿渋液を簡単に作ることが出来ることを実感できるようにする。</p>
<p>(2) 柿渋について</p> <p>□柿渋液がコーティング剤として多く用いられた理由を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防水効果 ・防虫効果 ・防腐効果 ・ものを丈夫にする ・安全（天然のコーティング剤である） <p>□柿渋の防水作用を体験する （紙を水につける実験を班ごとに行う）</p> <p>□柿渋液で布を染める</p>	<p>○活用例の絵や写真を示すことで，柿渋で染めることの効果の理解を深めるようにする</p> <p>傘⇒防水，丈夫 民家⇒防水，防虫，防腐，丈夫 酒袋⇒防腐，丈夫，安全 漁の網⇒防水，丈夫，安全 衣服⇒丈夫，防虫，防水，安全</p> <p>○化学繊維や化学コーティング剤がなかった時代であることも補足する。</p> <p>○実験により，防水効果を確認できるようにする</p> <p>○布や木を柿渋で染める様子を実際に見たり体験することで，柿渋の利用について考えやすくする。</p>
<p>3. まとめ（10分）</p> <p>□自分たちの生活の中で，柿渋を利用できることはないか考える</p> <p>□柿渋の活用について意見交流する</p>	<p>◆私たちの生活と柿の関わりの歴史を理解し，現代の自分たちの生活への活用を考えることができているか【生活や技術についての知識・理解】</p>

参考文献

- 松村博行，菊池日出夫.『そだててあそぼう知[30]カキの絵本』. 社団法人 農山漁村文化協会. 2011.
- 田中優子.『布のちから一江戸から現代へ』. 朝日新聞出版. 2011.
- 文部科学省.『中学校学習指導要領解説 技術・家庭』. 教育図書. 2008.